

俳雑

第19回

【韓国人の俳句】

八木 忠栄

欧米で「ハイク」が、古くから盛んに作られてきたことは知られている。世界俳句協会もあって、国際的に活発に活動している。フランスの有名な詩人ポール・エリュアールは、すでに百年前に俳句を作っていたし、アメリカのエズラ・パウンドも作っていた。

中国には漢俳協会がある。わが国には日本漢俳協会もあって、さかんに漢俳をつくっている人を私は知っている。では、お隣の韓国ではどうか？

もう一度濃きルーージュ引くコツセムチュイ

小さきもの董に語るときは母語

くちびるに花ひとひらや多弁恥ず

この三句は、韓国伝統舞踊家・金利恵さんの作品。金さんは東京生まれ。大学卒業後、伝統舞踊を求めて韓国へ渡り、ソウルに三十八年在住。私は金さんに会ったことはないし、韓国の俳句事情にくわしいわけではない。

「コツセムチュイ」は「花冷え」の意味。二句目、金さんは幼児期日本語で育ったが、韓国語こそ「母国語」。金さんは一月に、東京と名古屋で『俳舞』なるものを公演した。

（引用句は「中くらの友だち」6号から）